

文人キリスト者別所梅之助

笠原芳光

序

別所梅之助とはだれか。日本のキリスト教界には稀な文人である。文人キリスト者として最高の人物といつてよい。その信仰は正統的であつたが、教義的ではなく、むしろ自由で多元的な要素があり、神道や仏教にも詳しく寛容であつた。キリスト者にありがちな偏狭はなく、あらゆる事物に関心があり、好奇心に富み、人文のみならず自然の分野にもわたつて博識、今日いうところの学際的であり、そのおもな領域は国文学・民俗学・博物学である。漢籍や日本古典に通じるとともに、英語にも堪能で英書をよく読んだ。弁舌の士ではなく、文筆の人であつた。文章は美しく、詩的であつたが、多く詠んだ短歌はよいとはいえない。すぐれたディレクターであり、センスに富むエッセイストであつた。

性格は温和、繊細であるが、自己の考えや主張ははっきりと持っていた。権威や権力とは無縁の人であり、興味を示さなかつたものがあるとするれば、それは政治であろう。身体は強健ではなく、むしろ幼時より虚弱であつたが、節制につとめて長寿を保つた。都会人であるにもかかわらず、あるいはそれゆえに花鳥風月を愛し、よく山野を歩いて

風景を賞で、登山家として日本各地の山に登った。

その人物や思想に関する同時代人の批評によると、伝道者・宗教評論家の内村鑑三は別所の処女作『武蔵野の一角に立ちて』に序文を寄せて、「君の容貌と文体とは優柔やさしくあります。然し乍ら君自身は剛毅きつい人であります。君の衷には一物の動かすべからざる者があります」「基督教を信じ基督教会に在ると雖も、旧い日本人の魂を失はざる貴むべき我同胞の一人であります」「君は礼に敦くあります、約束を違へません。思考かんがえは広くあります、研究は益々深くあります」といつている。

また民俗学者の柳田国男は別所の著書『地を拓く』に寄せた序文のなかで「著述を愛読して、大きな感動を受けて居た」とのべ、その主題を三つあげて「同情に充ちたる自然の観察」「日本の文芸を楽しく彩どつて居る色々の言葉」「土に営む者の幽かなる生活」といつている。

さらに別所の弟子で宗教学者の比屋根安定は別所の著書『運命以外の一路』（選集）に付された「別所梅之助評伝」のなかで「彼の重んじたところは、一元よりも多元であり、論理よりも直観であり、先験よりも経験であり、絶対よりも相対であり、理論よりも生活であり、固定よりも流動であり、客観よりも主観であり、注入よりも印象であり、超越よりも生成であり、機械よりも情意であり、団体よりも個人であり、他律よりも自律であり、抽象よりも具体であったと言えよう」「彼の好きな話は第一に本、第二に旅行、第三は食物についてであった」「夫人の話によると、ほとんど毎日あたまが痛いといつぶやいたそうである。『あたまの痛くない人がいるかしら』と、ふしぎそうに言ったのを耳にした人がいる」と記している。

一 神道・儒教・仏教そしてキリスト教

別所梅之助は明治四年二月二日（太陽曆一八七二年一月二日）に東京の湯島神社に近い下谷坂町に生れた。以下、年譜的事実は別所の著『生きんとする意志』に付された「別所先生年譜」を参照する。『武蔵野の一角に立ちて』の末尾にある「迷宮」という自伝的文章によると、「湯島の天神様、あの高台で、をさない私が観た夕の月は、奇麗でした。今しも薨の波よりのぼる月は、金盞のやうに大きくて、赤かった。私はこの天神様の氏子であつた。母は御宮参りに私を連れていつて下された」と記している。なお、この章と次章の引用文で断りのないものは「迷宮」によつてゐる。

父別所萬右衛門、母しげのひとり子である。さきの比屋根の「評伝」は「生家はかなり大きな商家であつたらしいが、何を稼業としたかは明らかでない。下谷でも上野に近かつたし、別所という姓から考えると、東叡山寛永寺に入りした御用商人であつたかもしれない」という。一八七六（明治九）年、数え年七歳で父が亡くなり、以後、母の手一つで育てられた。しげは氣象はげしく、しばしば折檻をしてまで勉強させた。だが終生、母を思慕し、のち「ゆめに入る女性はひとりだ一人いまはあめなるははぎみにして」と詠んでゐる。

この年から下谷清海堂小学校に入学し、四年間在学した。その間、一八七九年より吉川昌介の私塾で、四書五経などの漢学と記紀などの国学を学び、古代から近世の文学書、歴史物などを数多く読んだ。やがて「神道には哲学がない。荷田春満、加茂真淵、本居宣長、平田篤胤の諸先生を経て、なほかつ、さうである。こゝに質朴な所はある、天を樂しむ所はある、気軽はある。しかし私はもう少し深いものを要する、身を没するものを求める、闊大なものを欲す

る」と思うようになる。

また儒教については「儒教は、身を修むること、天下を治むる事との二つ、即ち道徳と政治とを眼目としてを。身を修むるといふ方からは、独を慎むなどいふ工夫もある。それこれで実践道徳としては、かいなでのクリスチャンなどの及ぶ所でない」「しかしながら儒教には、そのかみの社会組織から承けついで弊がある。それは教の行はるゝ階級をかぎつた事である」「自由とか、民権といふことを聞きかじつた私を抑へつけるに、儒教は、つひに力が足りなかつた」とある。

やがて「十四五歳の事であつたらう。私は僧になりたいと、母に迫つた。幼くして父を失つた私は、そのころ既にいくらか、人中に出てゐた。気の弱い私は、どうも世のつとめに堪へられぬやうに感じた。それである縁の高い、そして其の下に秋海裳のしをらしく咲いてゐる寺に、生を寄せたいと思つたのだ」。別所の家の寺は、谷中にある真言宗新義派に属する長順院であつた。この寺の任職にかわいがられ、また近所にある同派の観心院にも、よく遊びに行き、母に僧侶になることを許してくれとせがんだが、いま許すとあとで恨むようになると反対された。

その頃、観心院の若い僧侶が本を買うというのでついていくと、遊廓に行かないかと誘われ、怖くなって逃げ帰つた。「私は、お寺といふ仙境へ、はひらうとした。それを知つてゐた此の小僧さんは、私の夢をこはしてしまつた」。のちに仏教のなかでは浄土真宗を頼もしいと思ひ、清沢満之らの改革運動を殊勝と見たが、一般に仏教が道徳的に健全でないことに批判的になつた。「私は世の中にをられる人間でない。さりとて寺にも落ちつけまい。私は、僧になるのを止めて下された母上に感謝する。離れてをれば私は『妙好人伝』にも涙を流す人間である」

一八八四（明治一七）年から大蔵省に勤務し、そのかたわら一八八五年から神田錦町にあつた東京英語学校の夜学に通つた。そこで、のちに『日本風景論』を著した志賀重昂に英語を教わり、キリスト教や札幌農学校の話も聞いた。

キリスト教に入るとなにか利益があるかと志賀に尋ねたところ、宗教は利益のために信ずるのではないといわれ、それが教訓になった。近所の神田美以教会にも通い、牧師石坂龜治の説教を聴いた。キリスト教は文明国の宗教だからよいだろうぐらいに考えていたが、「そのうちに、石坂牧師は、バプテスマの式の時に、私を呼び出した。私は、バプテスマを願つたとも思はないが、無論拒みはしなかつた。かくして、私は、メソヂストになつてしまつた。たしか明治二十年の暮であつたらう」という。そして一八八八年から京橋の福音英語学校の夜学に学んだ。

別所は宗教遍歴のちにキリスト教に入信したが、神道にも儒教にも仏教にも批判とともに評価すべきところがあると考へた。そのことは、この人の諸宗教に対する関心と寛容の精神を示している。「教会は、面白かつた。祈禱会にも活気があつた」。それはなぜか。「今までの智識に、統一があつた感じがした。思想がまとまりだした。歴史のうしろの神といふやうな事がわかり出した。人生といふものに色がついて来た。個人の尊貴を覺えた」からである。

二 牧師から教師へ

一八八九（明治二二）年、福音英語学校を卒業し、性にあわなかつた大蔵省を退職、青山学院の前身、東京英和学校英語神学科に入學した。「そこで早速困るのは、学資である。ミストル・ヴェールが、私に一週七時間とか、八時間とか、通弁をせよといふ。出来ない芸と断る。夫でも暫くして、二三時間づゝチャペル先生の通訳をする事になつた」

『聖書』には写本によつて相違があり、天地創造はユダヤ人の伝説、アブラハムのイサク奉獻の話は人身御供の禁止、「イザヤ書」の前半と後半は時代が異なるなど、当時の歴史批評的研究の成果を教えられ、眼が開かれた。しかし

「組織神学には、非常な遺憾をいだいた。私は、こんな本は、駄目だと思つた計りか、組織神学そのものを、つまらないと思つた」。別所のキリスト教思想が歴史的であつて教義的でないゆえんが、ここに始つてゐる。さらに「私が、神学校にをるうちに、新神学の運動が起つた。スピネル博士一派の新説、金森氏、横井氏などの論文、かれこれと、私の心を動かした。神学校を卒業するころには、私は、神田時代の熱心を失つた。教会なり、宣教師なりに対して、大に失望した」

しかし田舎に行つて百姓にでも船頭にでもなるつもりで、一八九二（明治二五）年に愛知県豊橋美以教会に母親をつれて赴任した。「青山で、西の国人に対して、大部望を失うた私は、こゝで新天地をひらかうとした。それを曲折に馴れぬ私は、たちまち彼の鋭い眼の持主と衝突するやうになつてしまつた。私のひがんだ心は、彼の人を横暴と想うた。私は楽しからぬ日を送つた。さてのち優しい人だと思つたのにと、いはれる様な事をした」とある。教会にはさまざまな人がいた。熱心な人、不安な人、キリスト教はよいが教会へは行かぬという人、教会も商売だという人。別所はよく東海道の並木へ松風の音を聴きに行った。山にはつつじやりんどうが咲いていた。

医者に神経衰弱と診断され、一八九四年、埼玉県の川越美以教会に転じた。川越では伝道に出かけて帰つてみると母親が着物を縫いかけたまま倒れてゐる。そのまま四日目にこたされた。「私は母に苦勞のみかけて居つた。生れては、育つか、そだたぬかと危まれ、幼うして家道の変にあひ、若うして我とさすらひの身になつた。この間、母は私あればこそ生き、私は母あればこそ生きてゐたのだ」

そして一八九五年、歌川とよ子と結婚した。母しげが敵母とすれば、とよ子は慈母型の女性であつたが、子供はできなかつた。一八九六（明治二九）年には按手札を受けて正式に牧師となつた。その頃、川越に遊廓を設けようという計画があり、仲間の牧師らとともに署名を集め、県会に請願し、中止させることに成功した。また五里離れた滝の

入という土地の羽二重織の工場に一〇〇人近い女子工員がいるのに頼まれて、キリスト教の講話をしたり、読書会をしたりした。そのなかから洗礼を受ける者も現れた。その頃の別所の伝道は熱心で、罪の悔改めや祈りをはげしく説いたという。

やがて一八九七年に『護教』の主筆を依嘱され、東京に帰った。『護教』は一八九一（明治二四）年に創刊されたメソヂスト系三教派の連合の月刊機関紙であり、のち『日本メソヂスト時報』と改題され、日本基督教会の『福音新報』や日本組合基督教会の『基督教世界』と並ぶ日本メソヂスト教会の機関紙となった。前任の主筆は歴史家愛山山路弥吉であった。別所は自らも多くの文章を『護教』に執筆することになる。

一九〇一（明治三四）年に『護教』主筆を辞し、母校の青山学院の教師となり、国語漢文を担当し、翌年からは青山学院でも国文学や聖書学を講じ、またのちには女子学院や自由学園でも教えた。教師としての別所について、比屋根の「評伝」はつぎのようにのべている。「彼の説教も講演も、ていねいに書いた原稿を用意し、それをそのまま読みあげた。声は細かったが、静かによく通り、独得の抑揚のある読みかたであった。教室で、国語を教える時も、同じ読みかたであって、学生が間違つて読まなくても、なだらかに読まないと、戒めた」「彼は、誤字やあて字をばなはだ嫌い、かなづかいにきびしかった。生徒の作文を返す時、字やかなづかいの誤りをていねいに訂正した」「彼の試験はきわめてきびしく、容赦なく落第点をつけた」

青山学院文学部英文科に一九三五（昭和一〇）年から四年間在学した松田重夫から一九八七（昭和六二）年に聴取したところによると、『源氏物語』や『世間胸算用』を淡々と現代語訳していく講義で、文学の味わいのわかる者にとってはよかっただろうという。また同年、青山学院英文専門科に一九一四（大正三）年から四年間在学した加古悠子から聴いた話によると、別所は東京弁というより江戸弁で「質問がおあんなさるならきいてください」と尋ね、

生徒に「わかりません」「知りません」「勉強しませんでした」と答えると、「ストライキですか」と笑った。試験は問題を、時には自作の短歌などを黒板に書き、監督をせず、書けたら事務所に提出するようになるといつて出ていったという。どうも男子と女子では扱いが違うようである。

三 讚美歌選定と聖書翻訳

別所の業績のうち、ひろく影響を及ぼしたものとして、讚美歌選定と聖書翻訳がある。一九〇一（明治三四）年、プロテスタント各教派協同の讚美歌委員に推挙された。「讚美歌」はそれまで各教派で異った歌詞、訳、曲、番号が用いられていたが、この年に日本基督、メソヂスト、組合、聖公会、浸礼の五教派から日本人の委員を選出し、外国人宣教師からも委員が出て、讚美歌委員会がつくられた。歌詞は別所、曲はT・M・マクネアが主査となって選定し、一九〇三年に第一編『さんびか』が上梓され、ついで一九〇九年出版の第二編『さんびか』、さらに一九三一（昭和六）年に改訂された『讚美歌』にも委員として尽力した。

別所の作詞した讚美歌は一九五四（昭和二九）年改訂の現行の『讚美歌』に一篇だけ採用されている。一五五番である。現代仮名遣いに変えられ、言葉も若干の改変がなされているが、一九一四（大正三）年作詞当時の形に戻して引用する。

空はうららかに 風はそよぎ／あらしは失せて かすみ立ちぬ／こずゑのみどり いろをまして／よろこびの声 よもにきこゆ／
花ひきつれて 春はきたり／すみか定めつ 野べにさとに／すみれあらはれ 桃はわらひ／やまぶきなびぎ さゆりかほる／ひ
ばりよたかく 雲間に舞へ／小川よひくく 岸にうたへ／わがイエス君は 失せしならで／ありしさまにて よみがへりぬ／山
よたたへよ きみのみ名を／谷もつつみも 丘もをどれ／みよ君います 失せしきみは／すくひのぬしと よみがへりぬ

これは春の到来とイエスの復活をうたった別所らしい非教義的な詩である。なお現行の『讚美歌』では、このほかに二七八番と三〇一番が別所の作詞とされているが、これらは訳であって作ではない。

一九一〇（明治四三）年には新約聖書改訳委員に任ぜられた。一八八八（明治二一）年に翻訳出版された『旧新約聖書』のうち『新約聖書』を改訳するため、委員には他に松山高吉、川添万寿得、藤井寅一、D・C・グリーン、C・K・ハリントン、H・J・フォス、C・S・デヴィッドソンがいた。別所は国文学者として日本語に詳しいだけでなく、英語にも堪能であり、『新約聖書』の原語であるギリシャ語にも通じていた。七年間かかって、明治の訳よりも正確で読みやすく、格調高い文語訳が一九一七（大正六）年に完成した。これはのち一九五五（昭和三〇）年に刊行された日本聖書協会による口語訳にくらべて、文章としてはるかにすぐれており、キリスト教外の文学者、作家の丸谷才一、歌人の塚本邦雄らも賞讃する名訳である。この改訳の苦心談は別所の著書にいくつかのべられているが、『江湖の中』の「聖書と訳の事ども」には「マルコ伝」の訳文に関して、つぎのような一節がある。

以前の訳の「橄欖」とあるは、まるで別物なので、学名の「オレア」を使つたのも叱られた。科学は日本人の方が支那人より一日の長があらうのに、支那ので判断されるのには困つた。しかしこれは分り易いやうに、あとで「オリブ」とした。一章の三五節のはじめを、「なほ夜深きに」と書いたら、誤訳だといはれた。讚美歌なら勝手な訳をした事もあるが、聖書は成るべく宗義をはなれまい、原文の上から必要なら、多少文脈が破れてもやむをえないと、私などは思つてゐた。それで宗義の上から「なほ夜深きに」を使つたのだが、堂々たる教授たちにも、「いづ方になきてゆくらんほとよぎす淀のわたりのまだ夜ふかきに」が分らないのなら、おしまひだと思つて、あとで「朝まだき暗き中に」と、分りさうなの改めた。

四 国文学、民俗学、博物学

別所梅之助の仕事を学問の領域であらわせば、国文学、民俗学、博物学といってよいだろう。しかし、そのどれ一つも専門的に修めたものではなく、すべて独学で学んだものである。およそ別所は自ら楽しんで勉強するというタイプの学者であった。それはアカデミズムとディレッタントイズムがよく調和した形といってもよい。もとより学位、学歴、学閥といったものとは無縁であり、それらに批判的であった。

別所が国文学に親しむようになったのは、少年時代、安井定孝と富沢春淇の塾に学んだ時からである。以来、『古事記』『日本書紀』『万葉集』『源氏物語』『大鏡』『方丈記』『山家集』『徒然草』さらに『南総里見八犬伝』『東海道中膝栗毛』等々を塾または独力で読んだ。「迷宮」によると「国文で私を楽ませたのは、徳川文学である。私に優しい情をあたへたのは平安文学である。しかし私を反省させたのは鎌倉文学である」。そして詩歌では「私の心を最も動かしたものは、西行であった」として「吉野山こずゑの花をみし日より心は身にもそはずなりにき」といった歌をあげている。

別所は多くのエッセイのなかで国文学の作品からの引用などはしているけれど、まとまった国文学に関する著作はない。むしろ国文学については研究よりも教育に、その業績があるというべきだろう。『生きんとする意志』のなかの「女学院の人々」というエッセイに、青山女学院での国文学講義の様子が記されている。

女学院へゆき始めたころ、私の講義したのは、たしか平安文学でしたせう。明治末期から大正へかけては、徳川文学をわりあいに多く説いたと思ひます。それは徳川文学の註釈書がその頃まで少なくなかつたからでもあります。上代文学を説きはじめたの

は、大正半過ぎてからかも知れませぬ。なにせよ、初は源氏物語が中心であり、または万葉集が主でありました。専門料の如くわりあい時間の多かつた時には、私は江戸から平安へとさかのぼつてゆきました

民俗学について、日本民俗学の父柳田国男が別所の著書に序文を寄せていることは、すでにのべたが、比屋根の「評伝」にも「柳田国男は彼の民俗学上の博識を高く評価し、筆者とあうごとなに、別所君は、近頃どうしておられるか、と必ず問安した」とある。この民俗学とつきにのべる博物学の仕事は詳細、精密にして、着想にとみ、学問的にも高い評価が与えられるだろう。

別所の民俗学に関するまとまった著述は一九三三（昭和八）年に刊行された『聖書民俗考』であるが、その「跋」の冒頭に『地に跡を印した人々』の中の末子相続の話を書いたのが、大正九年から、かやうなものに筆をそめてから、もう十三四年になる」とあり、「末子相続の話」が民俗学研究の成果として初期のものであることがわかる。この論はイギリスの人類学者G・フレイザーの著作の影響を受けて、末子や弟の相続の例が古来、世界中にあることを実証的にのべたものである。『聖書民俗考』において『聖書』のなかの民俗学的な問題、項目を例示すると、「かげ」「割礼」「星」「鈴の音・鐘の音」「日月をかへす話」「山羊羔をその母の乳にて煮ぬ事」など、そこには今日、注目されている社会史の要素も含まれている。

「かげ」の一節に「英語の Shadow は、影でもあり、幽霊でもある。シェキスピアのマクベスは、バンコーの幽霊に Hence, horrible Shadow」とわめく。タスマニアなどでも、影と霊とは同じ語であるとか。日本書紀では霊の字を、みたまと訓んだり、みかげとよんだりしている。私は『恋すれば我が身ぞかげになりける』との歌あれば、ヘブル人にわが「肢体はすべて影の如し』（ヨブ一七の七）との歎きがあり、イギリスには Worn to a shadow」といふ句がある」とあり、古今東西の文献も自在に引用されている。表題は「聖書民俗考」であるが、全体的な民俗学である

ことがここから知られる。

博物学の分野でも『聖書動物考』『聖書植物考』という二冊の著書がある。『聖書動物考』は「総論」と「各論」に分れ、「各論」には「軟体動物」「昆虫類」「哺乳類」「偶蹄類」などがあり、さらにそれぞれ個々の動物について、『聖書』の出典、形態や特徴、逸話などが記されている。たとえば「羊」の項の一節には「日本のやうな雨がちな国なら、食物には自然水分があるので、羊はさう水をほしがらまい。西の国々でもさうで、夏の日照がつよいて、草が焼けるやうな時にだけ、羊は盛に水をのむ。然るにパレスチナではいつでも水がある。水の豊かな所なくては、よい牧場といへぬ。従つて『エホバは我を緑の野にふさせ、いこひの水浜みぎわにともなひたまふ』(詩廿三・一)と、対句になつてゐる」とある。

『聖書植物考』も「総論」と「各論」に分れ、さらにこまかく分類され、個々の植物について詳しく書かれている。たとえば「葡萄」の項の一節には「史記に『大宛以葡萄為酒、通人蔵酒、至万余石、久者数十歳不败』とあり、古酒飲むべしとは人のしる所、『ふるき酒をのみて立刻たちちに新しき酒をのむものはあらじ、これふるきは最もよしといへばなり』(ルカ伝五・三十九)とあるも之をいへるに外ならず。聖書の酒とするせるものにアルコール分なかりしとは学者の与くみせざる説なり。聖書当時の人々の酒を飲みたれば、我も飲まんとは、アブラハムの道徳を今の世に行はんとする類のみ」とある。なお民俗学と博物学に関する研究の成果は、いまあげた三冊以外の著書のなかにも数多くみられる。

五 エッセイスト、登山家

別所の多岐にわたる業績のなかで、もっとも分量が多く、かつこの人の性格がよく發揮されているジャンルはエッセイである。世間ではエッセイやエッセイストを軽視する傾向があるが、卜部兼好やパスカルやモンテーニユの作品はエッセイである。別所を「昭和の兼好」とよぶ説があるようだが不当とはいえない。この人は重い思想をかるく、堅い問題をやわらかく表現することに長じていた。比屋根の「評伝」に「彼の文は、しばしば比喩的であった。『時代に先んじて覚醒する人は、無理解なる迫害にあわねばならぬ』と肩を怒らせ、ひじを張って生硬な漢語まじりの気焰をあげる文でなくて、彼は『朝早く起きる人は、つめたい風にあたります』と書く」とあるのは名評である。

きわめて多いエッセイのなかから執筆年代の違う二篇、それも一部分を紹介しよう。前のは『武蔵野の一角に立ちて』中の「わかき友に」、一九一五（大正四）年一月の作であり、後のは『朝のおもひ』中の「暮れゆく年」、一九三〇（昭和一〇）年一月の作である。

落ちる／＼と伝へられた旅順が、まだ落ちぬ頃であつた。明治三十七年の八月のある日私は、京都の博物館にはひつた。軍の國の真夏の日、観覧の人もまれ／＼だつた。館内はしんとしてゐた。とある室にきたら、二十まへかと思はれる娘が、丹念に狩野派の古画を模写してゐた。画は大幅の山水であつた。旅の私は、尊いやうな、物哀しいやうな気分になつて、浴衣ながら帯をしやんと結んだその人の後姿を見まもつた。そして妨げせじと、静にそこを離れた「略」爾來十年、しかも私は、当時のさまを忘れ得ない。その人は、中道にして画筆をすてたか、はた此の世にあらぬか。人の妻となり、人の母となつて、京のつゝまじき家庭を守つてゐるか。はては今年の『舞じたく』の筆者の如き光栄を勝ち得たか。はたまた、あの少女が、上村松園女史その人であつたか、そは、神の知しめし給ふ所である。

もう幾つ寝ればお正月と、楽しむのは小兒。若きは來ん年にと勇み立たうが、老いたるは年を送るのを易からぬ事に思つたりした。武蔵野に年とらず川といふのがあつて、大晦日になると流が絶え、一月になればまた流れ出づるとの伝へもあつた。さる川があつたとしても、冬は空気が乾燥するからだといふ解説だけでは済むまい。年の過ぎゆくを安からず思ふ念が、下に動いてゐたのでなからうか「略」冬至にクリスマスとの賑々しきに比して、除夜は一年をかへりみればか、敵かである。ふるき年を守

る念と、新しきを迎ふるおもひとが、入り乱れる。過ち多き我らは、斯く世を新にして神を迎へたいと念するのであらう。

別所はまた登山家であった。日本山岳会の古い会員であり、明治末期から大正初期にかけて、あの蒲柳の身で日本各地の山々に登った。『霧の王国へ』という紀行文の「まへがき」によれば、「私の山登りは、勇ましいのでも、元気なのもありません。私は氣息奄々として山へゆきます。しかもこれまでは大抵、一人旅、荷背負を頼んでゆくだけです。他の人と一緒にされるほどの余裕が、体にも、時にも無いからでもありますし、連の(マツ)入るほどの深い山に分け入らないからでもあります。一つには、他に頼るものなくして、強い自然に接したいといふ念が、下に動いてゐたからかも知れません」とある。この本によれば、別所の登った山は出羽の蔵王山、木曾の御嶽、富士山、越の立山、加賀の白山など、かなりの高山である。「晴の富士、雨の富士」の一節にはこうある。

喘ぎながら十時ごろ頂上についた。銀明水をすぎると、噴火口が、雪を含んで、落ちる(寝)贅を求めてゐた。火口をめぐつて、崩れ残つた山々が、敵(た)つ風をしてゐる。雲で遠望は、全くきかぬ。／頂上の石室で一休みしてゐるとまた風雨来。今度は、風が下から吹きあげて私どもを下界へ掃(は)きじとする。打ち倒せと突きかゝる。氷雨のやうな痛いのが、顔を打つ。帽からは、水がどん／＼流れる。眼鏡のガラスが濡れて、あたりは何も見えぬ。踏む石は、足をとらへ、つかまる岩は手を噛む。砂は風と聞(と)く声をあげて、人に迫る。強力(ツヨク)に扶けられて、やつと八合目に駆けこむ

ところで、さきにすこし触れたように別所は素人としては、かなり多くの短歌を作っており、歌集も二冊上梓されている。歌として、それほどすぐれておらず、歌人と称するのも難しいけれど、多様な関心と多彩な仕事の一部分として、短歌作品も数首ここにあげておくこととする。前の三首は『ひとりの歌』より、後の二首は『しづかなる調べ』より採った。

「ねがはくはけふは静けき心もてかの海を見んかの丘を見ん」「なき母の女ざかりのかず／＼の調度を見たりあかつきのゆめ」
「百万の大都のなかを幽谿にたゞすむごとく我ひとり居り」「老いてなほ夢見心地のさりやらす夕日の榮(は)にゲーテを思ふ」「東

天のことはをもちて西天の経うつさんとせしもゆめなり」

結

別所は東京の青山高樹町に住んでいたが、一九三三（昭和八）年に長谷川朝吉、神戸壬四郎らと世田谷講義所を創設して、自らも『聖書』を講じた。キリスト教以外の諸宗教にも寛容であった別所の信仰理解は「迷宮」の末尾に記された「渋いお顔」という詩のような短文によくあらわされている。

凡神教の神々は、優しい、美しい。／ほゝ喜んでおいでなさる、親しみ易い、／花園のやうな境だ。／一神教の神様は、きびしい、重々しい。／渋い顔をしておいでなさる、近づきがたい、／そゝりたつ山、はてしなき大野だ。／私は美しい方に、幾度かふりかへりながら、／渋い顔をしておいでなさる方にゆく。／美しくて厳しい方のおはさぬ限り、／私は渋い方にゆく。

一九四〇（昭和一五）年に青山学院を定年で退職し、以後、北沢に居を移して、著述と、おもにもとの青山女学院の卒業生たちに『古事記』や『万葉集』の講義をした。やがて一九四四年に軽い脳溢血をおこしたが回復した。しかし翌一九四五（昭和二〇）年、大戦末期、空襲もはげしくなりつつあった三月一日午後四時、脳溢血を再発、筆を手にしたまま急逝した。享年七五歳。青山墓地に埋葬された。忌日を、死去の季節に、また『武蔵野の一角に立ちて』冒頭のエッセイ「春浅し」に因んで浅春忌という。

以上が別所梅之助の人と思想と作品のあらましである。別所は稀なる文人キリスト者として数多くはない人々に敬慕されているが、なんといっても、古きよき時代の人と思われている。だが、その人をいま新しく評価しようとしている理由は、その思想が多面的で、自由であり、諸宗教にも寛容であること、非教義主義的であり、歴史を重んじて

いること、関心と著作が多彩であること、日常性や細部を尊重する民俗学や社会史の方法をとっていること、文章がセンスに富み、イメージ的であること、などである。懐古趣味ではなく、今日の新鮮な眼でこの人を見なおしたい。

著作一覧

- 〈エッセイ〉『武蔵野の一角に立ちて』一九一五年、警醒社。『蜜の流るゝ地を求めて』一九一八年、警醒社。
『地に跡を印した人々』一九二二年、警醒社。『運命以外の一路』一九二四年、警醒社。『心のふるさと』一九二六年、警醒社。『石を積む』一九三二年、警醒社。『江湖の中』一九三五年、日独書院。『朝のおもひ』一九四〇年、創元社。『地を拓く』一九四二年、警醒社。『生さんとする意志』一九四八年、二宮書店。『運命以外の一路』(選集)一九六〇年、教文館。『桃陰想旧溪』一九六一年、非売品。〈研究〉『讚美歌物語』(共著)一九一八年、警醒社。『聖書動物考』一九二〇年、警醒社。『聖書植物考』一九二一年、警醒社。『聖書民俗考』一九三三年、警醒社。〈紀行〉『霧の王国へ』一九一六年、警醒社。『山のしづく』一九二四年、警醒社。〈歌集〉『ひとりの歌』一九二二年、警醒社。『しづかなる調べ』一九四八年、二宮書店。〈翻訳〉シュルドン『教理歴史』(共訳)一九九二年、警醒社。

(かさはら よしみつ・京都精華大学学長)